



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語疑問文の統語語用論的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	馬, 穎瑞
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12512号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65374
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ma_Yingrui_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 馬 穎 瑞

学位論文題名

日本語疑問文の統語語用論的研究

本論文は、日本語の疑問文について、言語学的な知見に基づいて多角的に考察を加えた研究の成果である。主として、統語語用論と言われる考え方に基いて、日本語記述文法や談話文法の成果、また、文音調の研究の成果、語用論の種々の成果を用いて、網羅的に分析を加えている。

本論文の構成は以下の通りである。論文全体は、研究目的や論文構成を述べる第一章と、論文の要点をまとめて今後の問題を記す第九章とを含む、9章構成になっているが、本論部分は、おもに形式的分析に重点を置いた第1部（第二章から第五章まで）と、疑問文の使用動機とその使用上の効果た機能について分析する第2部（第六章から第八章まで）との、2部7章で構成されている。いずれも、日本語記述文法を中心とする現代日本語文法理論と、ポライトネス理論や会話構成論・会話分析のほか、グライス系の語用論の知見を基盤として、統語語用論の枠組みを利用しながら考察した成果となっている。各章ごとにその内容を簡潔に述べる。

第一章では、研究目的として5つのリサーチ・クエスチョンを掲げて、論考の方向性を明示しつつ、論文の構成について述べている。また、日本語のドラマの会話を分析対象の用例とすることについて説明がなされている。

第1部「日本語疑問文の記述と機能分析」は主に統語論的な面に重心を置いた論考になっている。まず、第二章では、先行研究に広くあたりながら、本論文における立場を明確にしている。疑問文は、主文末に終助詞の「か」を伴うなど形式的に定義できる面もあるが、この定義にあてはまる文のなかには疑問という意味機能を持たないものが少なからず含まれている。このため、まず形式的な面から3点を取り上げて分類を試み、それを意味機能と対応させつつ整理するという手順を踏んでいる。本章では日本語記述文法の成果を確認して、先行研究をもとに疑問文の機能類型を考察している。さらに語用論的な先行研究を引き、暫定的に疑問文の定義を与えて、本論文で分析対象とする疑問文の範囲を定めている。

第三章は、疑問文の基本的特性として確認しておくべきことを論じる。疑問文は、疑問詞が主節要素であれば原則として特殊疑問文をなすが、文末形式や文末音調によって疑問形式をつくることも可能である。次いで、疑問詞を主節要素に含んだり、主節末に「か」を伴ったり、形式上は疑問文の条件を満たしても、疑問の意味機能を担わないものがあることを確認し、形式と機能に単純な対応関係が成立しないこと、どのような対応関係を想定しておけば十全な分析が可能であるかについて観察事実を整理する。疑問の意味にならない場合には、形式的に関与する要因もあるが、話し手の知識状態や推定される聞き手の知識状態も関わることを指摘した上で、あわせて、これまで疑問文末形式として取り上げられた主要な複合形態を中心に確認し、それらの運用には常体と敬体が使用者のジェンダーや年齢層について非対称であることを実例とともに示している。こういった事実は、部分的・断片的にはこれまでも指摘があるが、広範に記述を試みた点は1つの成果である。

第四章と第五章では、先行研究を参考に、疑問文が有しうる要求性を言語的要求と非言語的要求とに分けることを提案し、下位区分を行った上で細かに論じている。例えば、下降イントネーションの「だめだったか」のように、事実を情報としては受容しつつ、心理的には完全に受容し切れていない発話では、疑問文が本来持つ応答要求性は欠落している。「静かにしないか」のように「静かにしなさい」に相当する発話では、非言語的なレベルの行為要求が要求性の中核をなしており、発話内力を有する発話行為となっていると考えることができる。特に、第四章では、要求類型として、言語的要求に含まれる反応・回答・命題確認・発話権取得、非言語的要求に含ま

れる行為要求・共感形成・知識確認・解釈処理などを挙げている。

第五章では、前章で論じた類型のうち言語的要求の一つとした発話権取得に関する現象を話者交替(turn-taking)として捉え直し、発話権の委譲とターンの終了の関係、次の話者としての聞き手の位置づけなどを整理して、疑問文が原則として応答要求をすることで話者交替とそれに伴う発話権委譲要求の力を持つことを前提に、実際の用例をとりあげて分析している。話者交替を喚起する場面としての適切移行場(TRP)を観察すると、話者交替を強く要求する「強いTRP」と、話者交替を認めてはいるものの応答を強く要求するわけではない「弱いTRP」とを典型として、両者のあいだには連続的な分布が見られることを指摘している。話者交替やTRPの持つ要求性に尺度的な段階性が認められるとする考え方が新しい案として提案されている。

第2部「疑問文の使用動機と談話効果」は、語用論的な分析に重心を置いている。まず、第六章では「かな」を典型とする独話に多用される形式を文末に用いるケースを中心に分析している。

「かな」は、日本語記述文法では《疑問》の「か」に対して《疑い》と位置づけられているが、実際の発話においては、回答要求を弱めた疑問文として多用されることを指摘し、話者がこの種の弱い疑問文を用いる動機には、強く回答を要求しないことで聞き手のネガティブ・フェイスを保護するネガティブ・ポライトネスのストラテジーが強く作用していることを述べている。加えて、日本語の会話では「行くの?」という上昇イントネーションの疑問発話に対して「どうしようかな」と疑問形式の応答が多いことを述べ、疑問形式で応じる場合には相手のポジティブ・フェイスへの侵害を回避するなど、ポライトネス的な原理が関与するとした。

第七章では疑問文のうち「非難を表す疑問文」を論じている。まず先行研究を概観して、どのような場合に非難やとがめだての意味を持つかについて確認している。本章では、非難を簡単に定義した上で、非難を表す疑問文は疑問詞を伴う特殊疑問文にも、Yes-No型の一般疑問文にも、いずれにも用いられることを確認している。さらに、語用論的な分析として、記憶領域に基づく文脈の演繹的設定を出発点として、非難の意味がどのようにプロセスで形成されるかを論考し、非難の強弱とどう関わるかを観察している。さらに、非難の疑問文が、疑問文としての本質的な機能(言語的要求と非言語的要求)などとの観点から、どのような類型をなすかを個々に論じる。

第八章では、ポライトネス理論を踏まえて疑問文を論じている。従来のポライトネス理論が、言語的要求と非言語的要求の二項対置で言えば、後者に重点を置く枠組みであることを踏まえ、前者に基盤を置くストラテジーとしてメタ的なポライトネスが想定されるとし、メタ・ポライトネスという概念を提案している。さらに、ポライトネス・ストラテジーと関連づける形で、いわゆる間接発話行為や、悲観視によるネガティブ・ポライトネスや楽観視によるポジティブ・ポライトネスと解釈できるものを論じ、否定疑問や疑いの文末形式の使用の効果について分析している。さらに、疑問文による共感形成や話者交替に関わるストラテジーについて言及する。

第九章では全体の論考をまとめ、今後の課題について触れて、論は閉じられる。